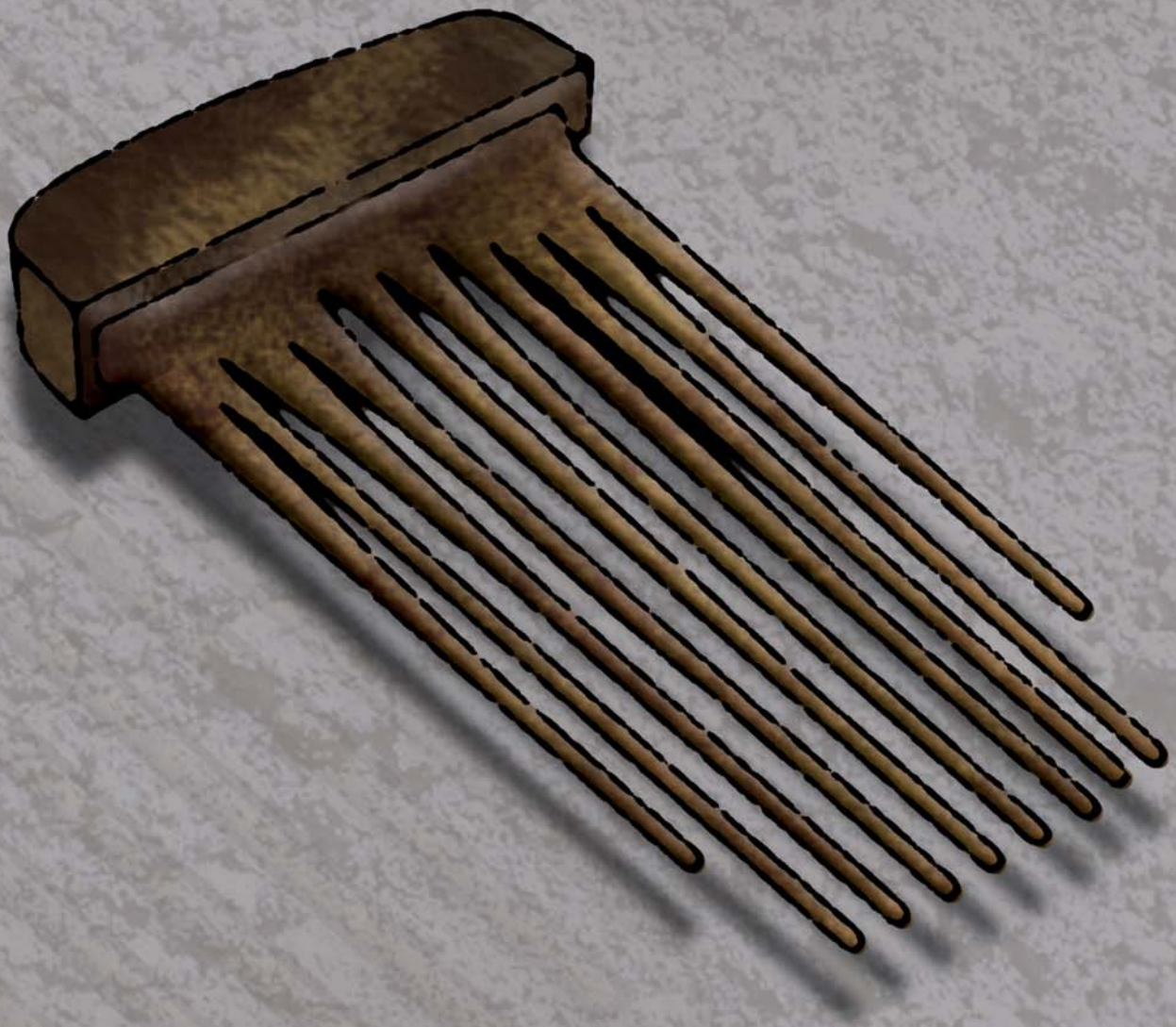
国指定史跡

伊礼原遺跡

― 時空を旅する 伊礼原 ―



北谷町教育委員会

はじめに

■ 北谷町の位置

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸沿いの人口約27,000人、面積13.77km²の町で県都那覇から約16kmと近い距離に位置している。北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接し、西側は全域が東シナ海に面する。気温は亜熱帯性気候(年平均気温約22℃、湿度75％前後)で四季を通して温暖である。現在町域の約53.5％は米軍基地が占めている。

本町の西海岸地域は、那覇市、浦添市、宜野湾市と連担する一大都市圏が形成され、物流、コンベンション及びレクリエーション等の都市機能が集積され、沖縄県の中核的なゾーンとして大きな展望をもつ開けた地域である。

■ 遺跡の発見

キャンプ桑江北側地区の返還が平成８年12月に日米安全保障協議委員会の「沖縄における施設及び区域に関する特別行動委員会（ＳＡＣＯ）」において平成15年３月末日に返還することが合意された。

平成7年度から返還跡地と関連地域を含め約40.5haを3年計画で文化庁の補助を受け、キャンプ桑江北側基地内の埋蔵文化財の試掘及び確認調査を行ってきた結果、返還予定地には10遺跡と６遺物散布地が発見された。現在、区画整理事業に伴う記録保存の発掘調査を行っている。

■ 位置及び地形

伊礼原遺跡は、キャンプ桑江北側内の戦前に存在していた伊礼集落の東側丘陵地の麓（ふもと）、台地と川に囲まれた沖積低地に位置する遺跡である。

地形は、背後に標高30mの台地を控え、そこから派生する2本の尾根が南西に突出し、西側の沖積低地に迫っていて、その尾根との谷間にウーチヌカーという湧水があり、その水系は遺跡の北側を流れるナガサと遺跡の西側で合流し河口の海岸へ流れている。

キャンプ桑江と伊礼原遺跡航空写真（西側上空から）

伊礼原遺跡の特長

■ 遺跡の特長

本遺跡は、平成８年度の試掘調査で発見され九州縄文時代前期の曽畑式土器を主体とする多量の土器、石器、イノシシの骨、リクガメの骨、魚類の骨や貝類などの多種類の遺物が出土した。さらに、種子や樹木などの有機質が出土したことは大変貴重で、その植物層から古環境が再現できるほど多数の資料が埋もれていることが判明した。

その後、平成10年度から平成17年度にかけて確認調査を実施した結果、丘陵麓に位置する「ウーチヌカー」の湧水を源とする低湿地遺跡（低湿地区）と、麓から沖積平野に拡がる砂丘に形成された生活址（砂丘区）からなる複合遺跡であることが明らかになった。

現在のウーチヌカー

遺跡は、湧水を利用して沖縄先史時代早期～縄文時代前期～晩期、弥生～平安時代相当期、グスク時代、更には戦前の集落までの人々の痕跡が連綿と続き、沖縄諸島の編年が網羅できるほどの履歴が判明した。

低湿地区は、丘陵麓に沖縄先史時代早期の南島爪形文土器や石斧が出土した。低湿地ならではの新資料の発見も相次ぎ、特に縄文時代前期に曽畑式土器を伴った、四隅を木杭で固定してシイの実を水につけて保存した笊（ざる）や木製品では縄文時代前期の石斧（せきふ）の柄（え）、縄文時代中期の大型容器、縄文時代晩期の櫛（くし）など大変貴重なものが出土した。

縄文時代前期の曽畑式土器期では、湧水の流れを利用した水辺遺構とその周囲に大量のシイの実や加工痕のある樹木、石皿、敲石、磨石、石斧等の遺物の広がりが確認された。

また、九州との交流を示す土器も確認されるなど行動範囲の広さに感嘆させられ、往時の人々の木製加工の技術面にも目を見張るものが数多く発見された。

砂丘区は、砂丘の形成と共に縄文時代中期、縄文時代後期、縄文時代晩期そして弥生相当期に生活址がみられ、その間に砂丘は２回の暴浪または津波にさらわれており、1度目は縄文時代後期に居住域が浸食されるほどの規模で砂丘が失われ、２度目は、弥生時代中期相当期頃に砂丘が失われ、再び地形が回復し15世紀頃のグスク期の柱穴群の集落が形成されたことが明らかとなった。

当初、砂丘の形成の拡がりとともに生活領域もそれにともなうと判断されたが、自然災害による侵食と砂丘の再生の繰返しが遺跡の立地にも影響したという新たな発見があった。

そのような環境の変化のなかでも往時の人々は、本遺跡に居を構え生活していたことから住み良い地域であったことが伺われる。

出土土器と土層柱状断面写真

グスク土器
（約800年前～500年前）

滑　石
（約800年前～500年前）

くびれ平底土器
（約2000年前～800年前）

グスク時代
（約800年前～500年前）
～
弥生～平安時代相当期
（約2000年前～800年前）

縄文晩期土器
（約2500年前）

荻堂式土器
（約3500年前）

面縄東洞式土器
（約3500年前）

市来式土器
（約3500年前）

面縄前庭式土器
（約4500年前）

室川下層式土器
（約4500年前）

曽畑式土器
（約5500年前～5000年前）

南島爪形文土器
（約6800年前～6000年前）

縄文時代
（約3500年前～2500年前）
（約4500年前～3500年前）
（約5500年前～5000年前）
（約6800年前～6000年前）

水田③
（戦前の水田）

水田②

地震

水田①

地震の変形

*1140±60BP
樹根層②
マングローブ

櫛
*2580±60BP

*4480±50BP
木製容器
地震の変形

石斧の柄
シイの実　笊
*5280±60BP

樹根層①
マングローブ

*カーボン測定年代

低湿地区の土層断面写真

（戦前の水田跡）

（マングローブ樹根検出状況）

（櫛出土状況）

（木製容器出土状況）

（石斧の柄出土状況）

（笊取り上げ状況）

伊礼原遺跡より出土した遺物

■ 主な遺物

① 土　器

写真は、約6800年前から800年前までの年代を示す、復元した土器である。

土器は、口縁部が「広いもの・反るもの・山形・狭い」など、底部が「突がったもの・丸みをもったもの・平らなもの」など様々な形が見られる。

最も古いものは、爪で文様を施した爪形文土器、最も新しいものは長崎産の滑石製石鍋をまねたグスク系土器である。

② 石　器

写真は出土した主な石器で、石鏃、石斧、石皿、敲石や磨石がある。

使われている石は久米島や慶良間諸島産の安山岩・玄武岩や伊是名・伊江島産のチャート、九州産の黒曜石などがある。

石　匙

約5500年前（縄文時代前期）には、打製石器が、3500年前（縄文時代後期）には、打ち欠いた後、磨きをかけた磨製石器が増えてくる。

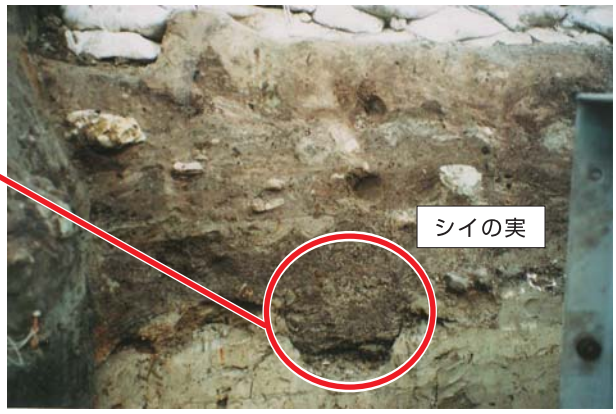
特に動物の皮を剥ぐのに使われたチャート製の石匙は沖縄で初めて発見されたものである。

③ 種子・堅果類・樹木

低湿地区の泥炭層より種子や堅果類・樹木が出土した。

縄文時代前期の層からはシイの実などの種子・堅果類３５種類が確認された。

同じ層からは四隅を木杭で固定した笊（ざる）が検出され、水漬け貯蔵の痕跡と考えられる。



また、その下部の樹木は落葉樹や常緑樹などの７６種類が確認され、縄文時代早期はやや寒冷な気候であった様である。動物遺体はイノシシや魚類、ジュゴン、クジラなどの骨が出土した。特に多いのはイノシシで、魚類はブダイ科・ベラ科などのサンゴ礁に棲むものが多くサイズは大きい。貝類は、現在は見られないマングローブに棲むハイガイやセンニンガイの他、サンゴ礁に棲むサラサバティラ、チョウセンサザエなどが出土した。

これらの自然遺物から当時の食糧事情や環境を窺い知ることができる。

④ 木製品

写真は、木製品で石斧の柄、大型容器、櫛(くし)である。

石斧の柄(縄文前期)は、クチナシを素材としたもので柄の長さ32.5センチで装着部の形から横斧用と思われる。

大型容器は、現在日本に自生しない(中国南部・台湾に自生)ショウナンボクを素材とし、縦27センチ、横63センチ、高さ32センチの船型である。木材の放射性炭素年代測定は4480±50年前(縄文時代中期)を示す。櫛の素材は、ヤエヤマコクタンで、櫛歯の長さ約6センチの縦櫛である。放射性炭素年代測定は、2580±60年前(縄文時代晩期)である。

⑤ 貝製品

写真は、貝を利用し、ペンダントや腕輪に加工したものである。写真右はクモガイやホシダカラ、イモガイなどを加工した垂飾品で、縄文時代中期～後期のものである。ゴホウラ製貝輪(写真左上)や未加工のゴホウラ・イモガイの貝集積(写真左下)が出土した。弥生時代の北部九州では腕に10数個装着した人骨が発見されている。

ゴホウラ・イモガイは沖縄諸島近海でしか採れない貝で、北部九州の弥生人がこれらを求めて沖縄に渡ってきた証拠品といえる。

⑥ 骨製品

写真は、イノシシやジュゴン・クジラなどの骨を利用したものである。イノシシの牙やジュゴンの骨を削って加工した腕輪や首飾り、クジラの骨に細かい模様を彫ったかんざしが発見された。また、イノシシの腓骨、ジュゴンの肋骨を利用した錐や針などの道具がある。主に縄文時代前～晩期のものである。

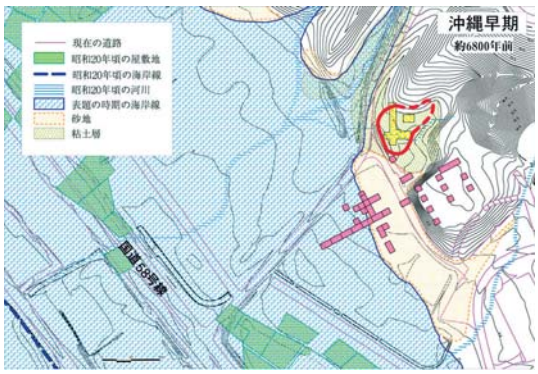
伊礼原遺跡の地形の遷り変り

縄文時代

■ 約6800～6000年前（沖縄早期）

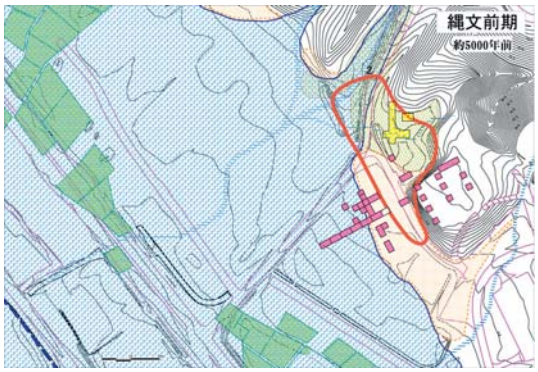
今から約6800～6000年前、丘陵麓より湧き出る湧水（ウーチヌカー）を利用し、その周辺に人が住み始める。沖縄で最も古い土器である南島爪形文土器や石器が出土した。当時の人々の住居址は確認されていないが、おそらく丘陵の岩陰を利用していたと思われる。

海進が進行し海面が上昇する。



■ 約5500～5000年前（前期）

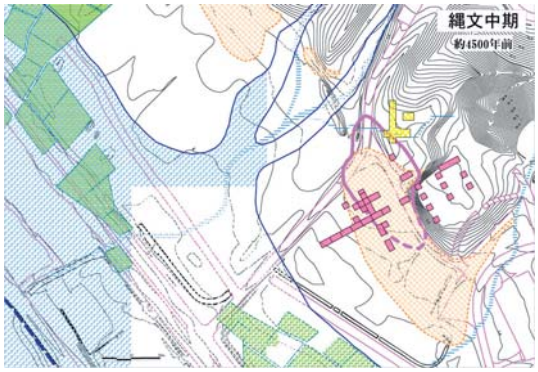
この時期、最も湧水を利用した痕跡が見られ、5～40センチ大の礫が遺跡の南西側に堆積する。その礫面から九州縄文時代前期の曽畑式土器と伴に石器や木製品・貝殻・獣魚骨・植物の種子・堅果類（オキナワウラジロガシ）が、礫の少ない南東側には種子の廃棄址や保存するための笊が水路に設置されるなど、いわゆる「台所」であったと考えられる。居住域は丘陵の西側に形成された陸砂であったと思われる。海岸線は遺跡の近くまであったと思われる。



■ 約4500年前（中期）

低湿地区の南西側は更に礫が堆積する。その上面からは板状の木片と石器、木製容器は横転した状態で発見され、容器の内側に礫が入り込んでいた。この時期も「台所」として利用されている。

低湿地区の南西側と南側の丘陵縁辺部に砂丘が形成され、そこから竪穴住居や炉址が発見され居住域が西側に拡がっていくようである。住居址の近くでは海獣骨や獣骨など骨製品の素材が分布する。このころ海岸線が後退する（海退）。



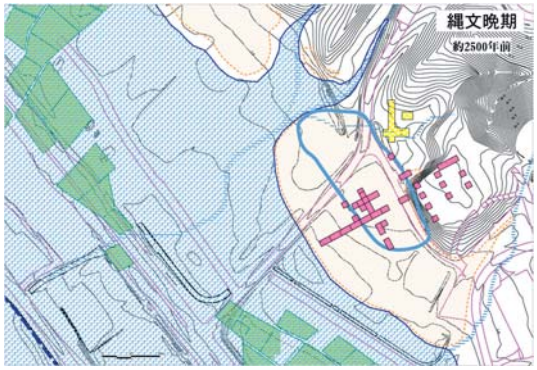
■ 約3500年前（後期）

この頃、低湿地区の利用度が低くなり、砂丘区の利用度が高くなる。砂丘の形成は更に西側に拡大し、竪穴敷石住居址が南東方向に分布する。住居址周辺には石皿などの石器や奄美系統の土器（面縄東洞式土器など）、獣魚骨などが散在する。この頃以降に1度目の高波による砂丘の浸食が起こる。その影響は居住域の一部まで及んでいる。

■ 約2500年前（晩期）

低湿地区の水路址で木製の櫛が発見されたが、利用度は低いようである。砂丘区では新たな砂丘が形成され拡大し居住域となる。その範囲は北側にも拡げ、砂丘奥側では石囲い炉が確認された。しかし、調査区域内から各種の遺構が重なりあっていたが住居址は未発見である。また、人骨片も検出され、周辺に墓域も存在する可能性がある。

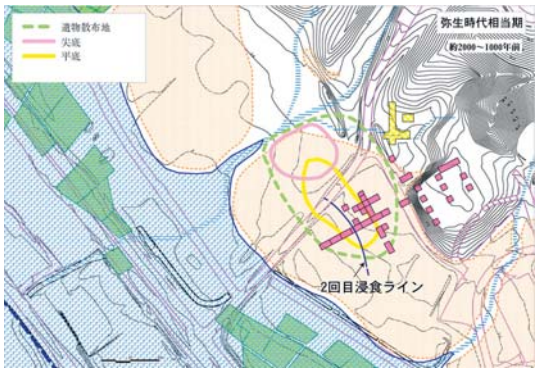
遺物は仲原式土器、そして九州産の黒曜石、新潟県糸魚川産のヒスイなど広範囲の交流を示す資料がある。



弥生時代相当期

■ 約2000年前

低湿地区の利用度は低いようである。砂丘区は更に拡大し、居住域となる。弥生時代前期の大型壺片、扁平片刃石斧、南島では初めての諸岡（もろおか）型（がた）ゴホウラ製貝輪の交易品なども発見された。弥生時代相当期の中期頃に２度目の高波で砂丘が浸食される。その影響は居住域の一部まで及んでいる。



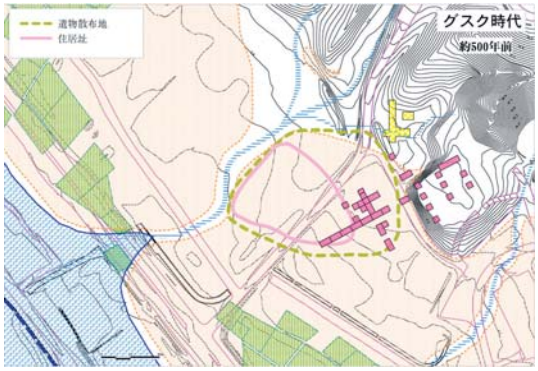
グスク時代

■ 約800～500年前

低湿地はグスク時代直前頃にマングローブ林の後背湿地が形成され、その後戦前までカワニナを含む地層が幾枚も堆積する。その厚さは１メートル余りで、各層とも有機質を安定して含み人為的に管理されていたようである。水田の利用も確認されている。

砂丘区では新たな砂丘が形成され、居住域となる。その範囲は北西側に拡がり、伊平集落の前進となる。

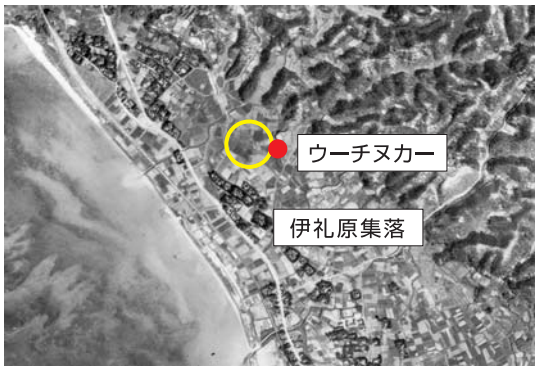
出土遺物は中国産陶磁器などがある。



戦　前

■ 約70年前

低湿地区は水田として利用され、湧水は伊平集落の産井として拝まれている。砂丘区は更に砂丘が拡大し、集落はグスク時代より西側へ移動している。集落は伊礼本字（21世帯）とイーマヤードゥイという首里からの屋取（18世帯）からなる。現在も屋敷囲いのフクギ林が現存している。



縄文時代の国指定史跡

沖縄県内の国指定史跡は、平成24年5月1日現在、36件あり、そのうち縄文時代の史跡は7件となっている。伊礼原遺跡は、縄文時代の遺跡として実に24年ぶりに国指定史跡に指定された。

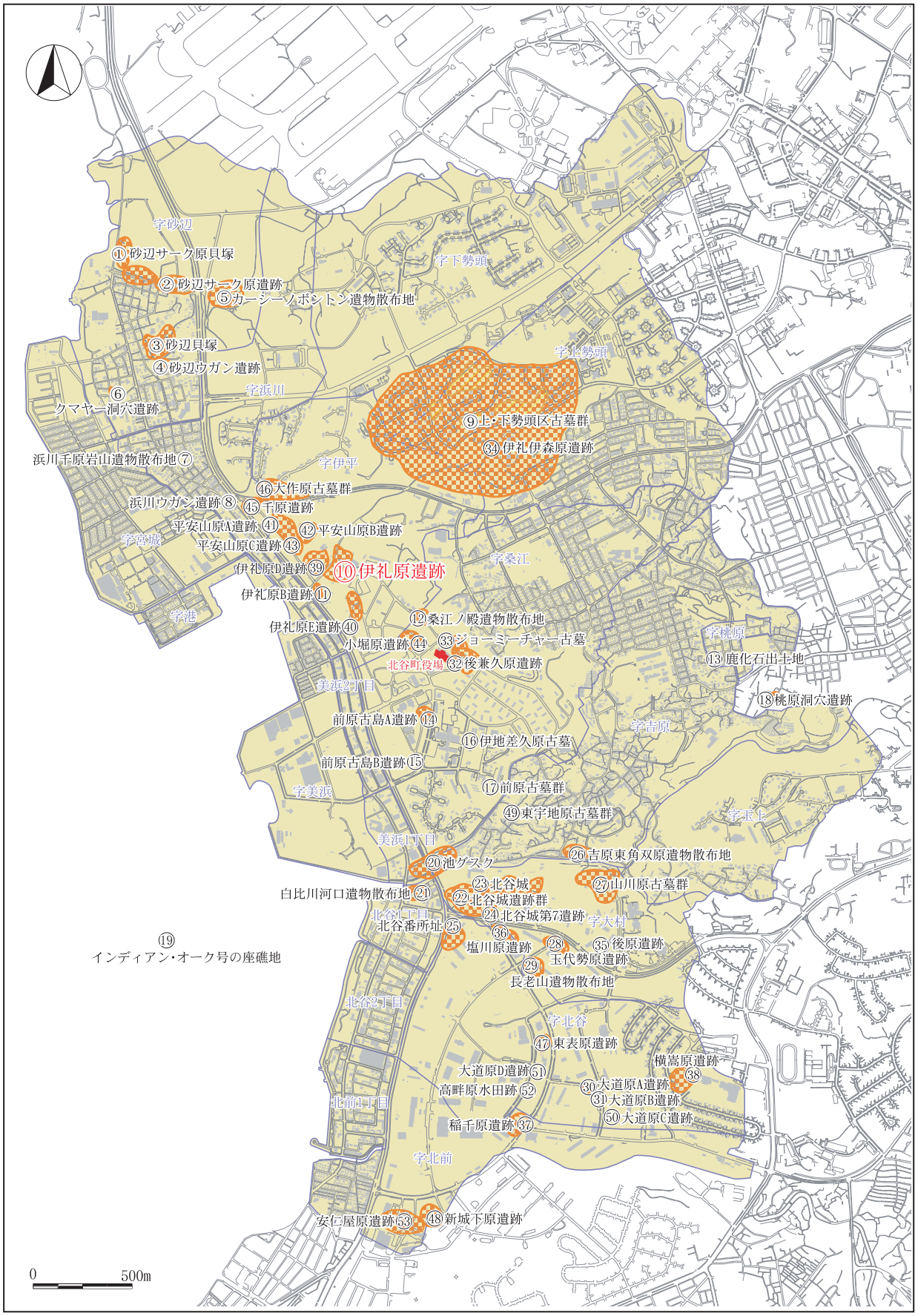
その他の主な国指定史跡として、首里城跡（那覇市）、浦添城跡（浦添市）、勝連城跡（うるま市）、座喜味城跡（読谷村）、今帰仁城跡（今帰仁村）、斎場御嶽（セーファウタキ（南城市））といった、現在世界遺産に登録されているものや、具志原貝塚（伊江村）、木綿原遺跡（読谷村）等が挙げられます。近年では、島添大里城跡（南城市）が2012年1月に国指定史跡に指定されている。

縄文時代の国指定史跡略表

番号	遺跡名	所在地	国指定年
①	宇佐浜遺跡	国頭村	1972年
②	伊波貝塚	うるま市	1972年
③	荻堂貝塚	北中城村	1972年
④	大山貝塚	宜野湾市	1972年
⑤	仲泊遺跡	恩納村	1975年
⑥	仲原遺跡	うるま市	1986年
⑦	**伊礼原遺跡**	**北谷町**	**2010年**

縄文時代の国指定史跡位置図

北谷町の遺跡分布図


字砂辺
①砂辺サーク原貝塚
②砂辺サーク原遺跡
⑤カーシーノボントン遺物散布地
③砂辺貝塚
④砂辺ウガン遺跡
⑥
クマヤー洞穴遺跡
字浜川
浜川千原岩山遺物散布地⑦
字下勢頭
字上勢頭
⑨上・下勢頭区古墓群
㉞伊礼伊森原遺跡
字伊平
㊻大作原古墓群
浜川ウガン遺跡⑧
㊺千原遺跡
平安山原A遺跡㊶
㊷平安山原B遺跡
平安山原C遺跡㊸
字宮城
字桑江
伊礼原D遺跡㊴
⑩伊礼原遺跡
伊礼原B遺跡⑪
字港
伊礼原E遺跡㊵
⑫桑江ノ殿遺物散布地
小堀原遺跡㊹
㉝ジョーミーチャー古墓
北谷町役場
㉜後兼久原遺跡
字桃原
⑬鹿化石出土地
⑱桃原洞穴遺跡
美浜2丁目
前原古島A遺跡⑭
字吉原
⑯伊地差久原古墓
前原古島B遺跡⑮
字美浜
⑰前原古墓群
㊾東宇地原古墓群
字玉上
美浜1丁目
㉖古原東角双原遺物散布地
⑳池グスク
㉓北谷城
㉗山川原古墓群
白比川河口遺物散布地㉑
㉒北谷城遺跡群
北谷1丁目
㉔北谷城第7遺跡
字大村
北谷番所址㉕
㊱
塩川原遺跡
㉘
㉟後原遺跡
玉代勢原遺跡
㉙
長老山遺物散布地
⑲
インディアン・オーク号の座礁地
北谷2丁目
字北谷
㊼東表原遺跡
横嵩原遺跡
㊳
大道原D遺跡㊺
㉚大道原A遺跡
高畔原水田跡㊷
㉛大道原B遺跡
㊿大道原C遺跡
北前1丁目
稲千原遺跡㊲
字北前
安仁屋原遺跡㊸
㊽新城下原遺跡
0
500m

おわりに

■ 遺跡の重要性

伊礼原遺跡は、ウーチヌカーの湧水を中心として縄文時代からグスク時代まで約7000年間の人々の生活址が見られる極めて貴重な地域である。

遺跡は、丘陵麓から海岸方向へ拡がる低地にかけて立地している。往時の人々がこの地を選んだのは、丘陵麓から湧き出る湧水の存在が飲料水を確保し、山と海を育んだ自然の幸が得られやすい環境であったからと考えられる。そして、この地理的環境を活かし、低湿地区の湧水域を「台所」として、砂丘区の平地は住居として「集落」を形成していったようである。このような状況は、低湿地区では約3500年前以降、利用度が低くなるが湧水は涸れることはなく、マングローブ林や水田へと変化し現在に至っている。一方、砂丘区は丘陵側で古い遺跡が存在し、砂丘が拡がると新しい遺跡が展開し、戦前まで集落を形成していた。戦後は米軍基地に接収されるなど各々の時代の環境に適した地の利の良い地域であったようである。

遺物は、従来は残りにくい種子や樹木などの保存状態が良好で、獣魚骨・貝殻など多種類出土した。これらの分析結果から往時の古環境が復元できる貴重な遺跡である。

特に、南島（南西諸島）で縄文時代の約4000年間の全時期が連続して見られる遺跡は、この「伊礼原遺跡」に限られており、沖縄、延いては南日本の縄文時代を知るうえで極めて重要である。

■ 遺跡の保存活用

遺跡の保存活用については、平成24年度に策定した保存管理計画に基づき保存・管理し、公有化を図った。今後は史跡の整備を行い遺跡公園として一般の利用に供する予定である。

また、「ウーチヌカー」の源である東側丘陵（現在米軍基地）についても返還後に追加指定し、縄文の森をイメージした住民の憩いの場として整備する考えである。

遺跡に隣接した場所には、町立博物館の建設を行ない、周辺の教育施設等も含めた歴史・教育ゾーンとして活用していく予定である。

さらに、これらの施設を西海岸地域と連携を図り、観光資源として地域活性化に寄与する施設として整備することとしている。

伊礼原遺跡整備イメージ図

伊礼原遺跡の発掘状況

■ 低湿地区

■ 砂丘区

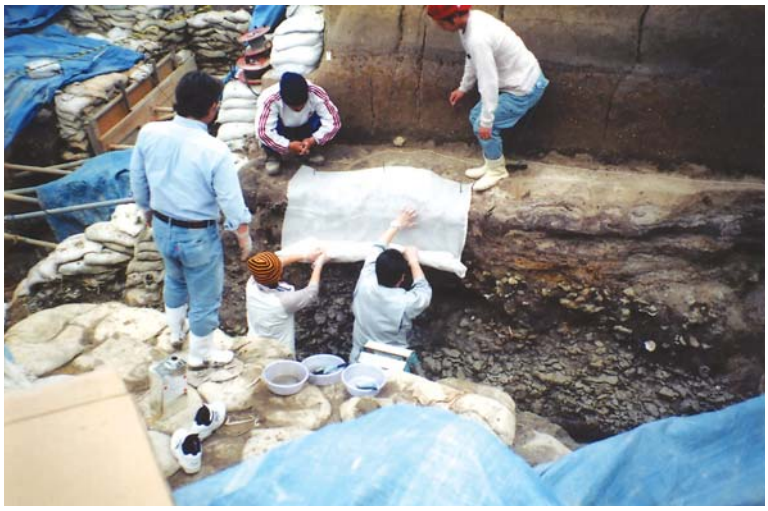
■ 住居址

低湿地区

■ 作業風景1

■ 作業風景2

■ 壁面はぎ取り



砂丘区

■ 作業風景1

■ 作業風景2

■ 柱穴検出状況

国指定史跡 伊礼原遺跡

— 時空を旅する　伊礼原 —

編集　北谷町教育委員会
発行　平成25年９月　北谷町教育委員会
〒904-0192　北谷町字桑江226番地
TEL:098-936-3159